

開催地名	大分県玖珠郡九重町
開催日時	令和7年9月19日(金) 13:30 ~ 15:00
開催場所	九重文化センター
語り部	吉田 亮一(宮城県仙台市)
参加者	九重町立ここのえ緑陽中学校 生徒(1・2年生)132名 玖珠郡内教育委員5名 町議会議員5名
開催経緯	9月は防災月間とされている。 自然災害、地震にいかにも備えるか、町内では津波の被害はないがこの先津波にあう可能性もある中、どのように命を守るのか、また守ったあとはどうするのか。 生徒の皆さんにこれを機に考えてほしい。
内容	<p>講演「災害時の備えと地域コミュニティの役割」の要旨</p> <p>この講演は、総務省消防庁の防災推進プロジェクトに携わる吉田氏が、自身の豊富な経験に基づき、大規模災害への備えと地域社会における各個人の役割について熱く語ったものです。吉田氏は、阪神・淡路大震災や東日本大震災など、計5回の地震災害を直接経験してきた自身の体験を交えながら、防災の本質を聴衆に伝えています。</p> <p>◎防災の第一歩は「危機感」</p> <p>最も強く訴えているのは、防災の基本である「自助・共助・公助」の前提として、何よりもまず「危機感」を持つことの重要性です。</p> <p>多くの人々が「自分の地域では大災害は起こらないだろう」「備えなくても何とかなるだろう」と考えがちですが、災害はいつ、どこで、どれほどの規模で発生するかは予測できません。南海トラフ地震を例に挙げ、注意情報が出て「何も起きなかった」と安堵する人々がいる一方で、東日本大震災のように何の兆候もなく突然発生する災害もあると指摘。科学の限界を認め、人間が立てた「想定」を超える事態に備えることこそが、命を守る上で不可欠であると強調しています。</p> <p>◎中高生が担う避難所運営の主体</p> <p>講演の中で最も印象的なのは、東日本大震災時の避難所運営における子どもたちの役割についての話です。災害発生は平日午後であり、多くの大人が職場にいる中、</p>

地域に残っていたのは主に小中学生や高齢者でした。吉田氏が運営責任者を務めた避難所では、行政や学校職員の手を一切借りず、100%地域住民の主導で17日間運営が続けられました。この中心的な役割を担ったのが、中学生や高校生でした。彼らは自発的に炊き出しの献立を作成し、物資の在庫管理を行い、高齢者や小さな子どもたちの世話を献身的に行いました。

また、プールの水をバケツで運び、高齢者宅の仮設トイレを清掃する作業も行い、自衛隊から届いた救援物資を整理するなど、自主的に様々な役割を分担しました。この事例は、子どもたちが日頃からの防災訓練を通じて、いざという時に驚くほどのリーダーシップと行動力を発揮できることを証明しています。

◎地域活動は「当たり前」の行動

このような災害時の協力は、決して「ボランティア」ではないと断言しています。家族の中で家事や手伝いをすることがボランティアではないのと同じように、地域は「大きな家族」であり、その中で互いに助け合うことは「当たり前」の行動だと説いています。日頃から地域の清掃活動やお祭りに積極的に参加し、地域社会とのつながりを深めることが、いざ災害が発生した際に、自然と互いを助け合う共助の精神につながると強調しています。

最後に、吉田氏は聴衆、特に若い世代に向けて、自分たちの地域は自分たちで守るという強い意志を持ち、日頃からできることを実践してほしいと呼びかけ、講演を締めくくりました。これは単なる防災知識の伝達に留まらず、地域コミュニティの一員としての自覚と、助け合いの精神を育むことの重要性を訴えるメッセージでした。



開催地より

震災を実際に経験した方の話は、心にしっかり伝わってくるものでした。生徒のアンケートにも「地域の一員として頑張る」「お惣菜のお皿を集めようと思った」「避難所開設の動きが少しわかった」等、前向きな言葉が多かったです。特に小学生の時から吉田さんの話を聞いている女子生徒は、年々自分なりに考えたことが増えていき、リーダーとしての資質が高まっていると吉田さんから褒められていました。このような経験は毎年積み重ねた方が身につくと思うので、来年度も続けていきたいと思っています。